

宮崎大、先導的 IT セミナー「コンピュータ将棋の最前線」を開催

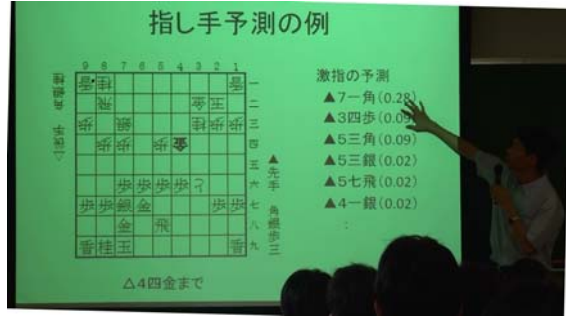
宮崎大学では7月8日（金）、北陸先端科学技術大学院大学准教授鶴岡慶雅氏をお招きし、先導的 IT セミナー「コンピュータ将棋の最前線」を開催した。会場には、学生・教職員等、あわせて約70名の参加者が集まった。

コンピュータ将棋の実力は、プロ棋士のレベルに到達しつつあるといわれる。実際、昨年秋、コンピュータは清水市代女流王将に勝利している。将棋ソフト「激指」（世界コンピュータ将棋選手権において過去4回優勝）の開発者である鶴岡氏は「そもそも1秒間に30億回も計算する機械に人間が勝てるわけがない。ところが、人間はどういうわけか賢いので勝ってしまう。これが面白い。人間が負けてしまうと寂しい」とはじめに語られた。

コンピュータはどのように次の一手を考えているのだろうか。鶴岡氏は、「ミニマックス法」と「枝刈り」とよばれる探索原理を解説され、これをコンピュータに実装すると、最新の将棋プログラムと本質的に同じ事ができることを紹介された。最強ソフトを作るには、もちろん工夫が必要である。プロ棋士は、20手先、30手先まで読むと言われているが、いくら1秒間に30億回計算できるコンピュータを使っても、10手先とか20手先は、可能な指し手の数が爆発的に増えてしまい、読むことができない。この問題をどう解決するか。「これから5手先まで読もうと考えて、将棋を指している人はいない。人間は、いかにもありそうな展開を深く読み、どうでもいい展開は読まない。」鶴岡氏は、そのような思考法をコンピュータで実現するため、局面の実現確率を計算し、探索範囲を決定する独自の手法を紹介された。

コンピュータが名人を超えるのはいつになるだろうか。鶴岡氏は「プロ棋士の間には、あと100年くらいは人間が上だろうとの意見もあった。しかし100年はもたない。将棋ソフトは強くなりすぎた。これからは、自分がどこで間違えたのか、どこまで有利だったのか、棋譜を分析して、人間の上達を助ける、将棋ソフトのそういう役割を充実させることが重要になっていくのではないか」と今後の展開を予想された。

（文責：情報システム工学科 伊達章）



鶴岡氏によるセミナーの様子